週刊ダイヤモンド 〈2016.11.19 ／ 46 ～ 47 ページ〉 掲載

社長・冨田賢のコメントが、
母校・金沢大学附属高校について掲載されました。

金沢大学附属

日本海側トップを自任 毎回盛況の「野霞会」

石川県屈指の名門校、金沢大学附属高校は、日本海側の代表的な官僚輩出校だ。それを象徴するのが正式な同窓会とは別の、官僚になった者だけが集う非公式組織、「野霞会（のがすみ）」だ。

金沢市の野田山の麓にある金沢大付から、数十年を経て東京・霞が関に再び集う会ということで、それぞれの土地の頭文字を取って命名された。定期的に会合を開いており、毎回40～50人が集う。正式な同窓会には顔を出さないが、野霞会だけは出席する者も多い。

金沢大付は1学年約120人で学校規模は小さい。それにもかかわらず、なぜ多くの官僚を輩出できるのか。ヒントは同校の独特な〝空気〟にありそうだ。

「敵は鹿児島と兵庫にいる」「君たちはエリートなんだ」――。

これは実際に何度も、ある教諭から生徒へ向けて投げ掛けられていた言葉だ。鹿児島とはラ・サール高校、兵庫は灘高校を意味する。両校とも難関国公立大学入学実績で全国トップクラスだ。

この教諭は長年、教鞭を執っていた名物教諭。同窓会では、彼の話題が世代を超えて卒業生の酒のさかなになるという。

多感な高校時代に、こんなストレートな表現で鼓舞され続ければ、自然と言葉通りのエリート意識が芽生えるというもの。クラスメートに負けまいと、毎日出される膨大な宿題を当たり前のようにこなし、成績を競い合う雰囲気が同校には漂っているという。

実際、金沢大付生の実力テストの結果は、石川県内の順位と校内順位がほぼ一緒というから、教諭の言葉が見事に生徒たちを感化していたということだ。一時は東大と京大の現役合格者数が総数で30人を超えていたこともある。実に学年の4分の1にもなる。

「口には出さないが、生徒の誰もが〝日本海側ナンバーワン〟だと思っている」（卒業生）というのも違和感はない。

こう聞くと鼻につくが、この〝空気〟は確実に生徒たちを鍛え上げる。卒業生の一人、ティーシーコンサルティング社長の冨田賢は「高校時代にあれだけ優秀な同級生たちにもまれて勉強したという自負が、社会に出てからの原動力となっている」と話す。

同校のエリート教育は確実に社会を生き抜く力を養うようだ。

東京もんに負けとれん！ 中央で闘う地方組の矜持

北海道札幌南高校と石川県の金沢大学附属高校の2校は、全国屈指の中央への人材輩出校。地元の誇りを胸に日々闘う彼らは、同郷同士励まし合い、また素に戻れる場を持っている。